

神様は言った、

1mm

声が、悲しい記憶のように、
耳の奥から剥がれない。

[神様は言った、]

カラスが鳴くからかーえろっ、
カラスが鳴くから帰りましょ。

幼い頃から聞いていたそれは、今なら、戒めであったのだと思えている。知らず、自発的にそう笑っては、帰路に着いていたものだ。

戒められていた理由を考えるのは難しくない。とはいえ、幼い頃より今の方が、物騒事は増えてしまったように感じるけれども。

遠くに、子ども達の笑い声を聞きながら、歩く。

ゆっくりゆっくりと動いていた日は、夕方になるとまるで足を速めたかのように、あっという間に空の色を変えていく。水色から黄色、オレンジ、ピンク、赤から紫、そして濃紺へ。

そんな目まぐるしい変化を、ぼんやりと眺めながら、歩を進める。

わざと、あの速さに追い付かないように、ゆっくりと。

(夜が、来る、)

暗くなったら、危ないよ。

よく聞くようになった、本当に。

そんなことは勿論分かっている、だから、普段はなるべく日暮れ前には家に着いている。

けれど、今日は。

(思い出したからだろうか。)

あの歌を。

そして、……ちょっとした、反抗心を。

カラスが鳴くからかーえろっ、

素直に、家路に着くことが多かった。けれど、たまに、やはり思っていたのだ。

……もうちょっとだけ、なんて。

足早に日が落ちる中でのもうちょっとなんて、いつまでもとも言わない

ような時間を。

カラスが鳴くから帰りましょ。

(……やっぱり、)

(もう少しだけ、寄り道して帰ろうかなあ、)

ふと落とした目線に、掛かる影。

いつまで？

「え？」

ふ、と。

聞かれた気がして。

バツと上げた顔、視線の先の空には、黒い影が飛んでいるだけ。

カァ、カァ、

でも、何だか、本当に、それだけじゃなくて、

(気のせい、)

だろうか。

でも。

不安が差して、何となく落ち着かない気持ちになってしまった。そわそわと。

ゆっくり進めていた足を、徐々に速める。

(やっぱり、早く帰ろう)

決めて。

空をもう一度見上げる。

赤い色はもうほとんど消えかかっている、夜の色に切り替わろうとしている。

その色の濃さに今更はっとして、ほんの僅か、足を止めてしまった。

ゆらり。

一瞬視界が揺れた。

(……疲れてる、かな。早く帰らなきゃ)

ふ、と。また。

ゆらり。

そうして、視界の端に影が過った気がして、無意識に視線を動かした。

動かしてしまった。

「、」

ああ。

一瞬ではなく、視界だけではなく。今度こそ大きく、世界が揺れた。
ああ。

夕暮れの速さに追い付かないように、なんて。
そもそも、追い付けるはずもなかったのに
ああ。

遠くで笑う声がある。
カラスが鳴くからかーえろっ、
カラスが鳴くから帰りましょ。

帰らなきゃ。

(でも、)

遠くで尋ねる声がある。
いつまで、いつまで？
(きっと、もう、)

間違いなく、もう少しだけ、だなんて思ってしまったあの時が、境界
線を跨いでしまった瞬間だったのだ。
きつともう。

(いつまでも、帰れない。)

(かみさまはいった、それなら、ずっと私と遊ぼうか。)

(強引に私の手を取って)

(私と世界を切り離す)

(遠くで、あの鳥が、私の代わりにないていた)

*

1,300字。

以津真天と私と神隠し。